

Title	雜錄
Author(s)	
Citation	日本外科宝函 (1930), 7(5-6): 735-739
Issue Date	1930-09-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/200566
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

雜 錄

鳥潟教授通信

Sauerbruch 教授の仕方

獨逸の大學教授は一般によく怒鳴るがそれは畢竟人が好いからで決して底意地が悪いからでは無い。S教授も其一人で Zürich に居つた頃助手連が「ストライキ」を起したり、學生が猫音楽 (Katzenmusik) をやつたりした事が二度計り新聞にも出た。それは1912-1917年頃であつたが1930年の今日でも相變らず元氣がよい。

臨床講義が済んで學生がぞろぞろ階段を昇つて出口の方へ行くが教授は中々歸らぬ。無論手術をして居るでも無い。どうしたのかと思つて昇りかけた階段で立ち止つて後ろを見るが早いか助手連に取巻かれて居る S教授は大きな聲で「靜かに歸れ！」を學生共の背中へ浴びせる。學生の1人が自分の方へ向つて獨り言の様に Das sagt er immer Quatsch! と吐き出す様に言ひながら歸つて行く。

此の講堂はどうも聲の透りが悪い(日本でも新築の際には餘程注意せざるまい)。其代りに講義用の掛圖や模型や標本などは實に豊富にある、日本の大學外科で此の様に行き届いた講義用の準備をして居る處が他にあるかも知れぬが京都では無い。京都でも是非此の講義用設備を完成せねばなるまい。

臨床講義の時には プラクチカントの腕を引つぱる、背中を叩く、種々な事をする、或時斜頸の手術で皮下で腱を切斷する方法を説明すると言つて刀をプラクチカントの頸の處へ持つて行き皮下で切斷するには斯くの如くすると言ひながら其學生のネックタイを腱と見立てて横に切つてしまつた。學生は不機嫌な顔をして居るが聴講學生はやんやと喝采する。講義を續けながらネックタイの代りを持つて來させる。看護婦が一つ持つて來たが代償にはならぬ、學生の顔はだんだん硬くなる。「教室にはどうもネックタイの準備(Reserve)が無いので——君、怒つたのかへ?」「いや、怒つては居りません」「Humor を諒解してほしいね」など言つても學生は眞底不服らしい。

歸宅の電車を待つて居ると Graefe の銅像の有る Charité の四つ辻を白い診察服を着た助手の1人と例の學生と連れ立つて通つた。多分ネックタイの辨償をする爲に買ひに行つたのであらふ。

患者に就て診斷方法や治療方法を歩一歩と理論的に解明して行くやり方(所謂 méthode de clinique) は却て Bier 教授の方で——それも十分では無いが——行はれて居る。

S教授のやり方は普通様式の講義である、併し材料が豊富である故日本の空講義とは違

ひ印象が強く残る、特に上に述べた様な Methode を講義に用ふるから印象が更によく貼る。

日本では併し此の様な講義振りは下手に眞似は出来まい、原著や、譯翻や、或はラヂオなどが何の様に進歩しても教授の講義を代償する譯に行かぬのは此の點に在る。従て強烈な自信を持つて一言一句を學生の腦裏へ刻みつける様で無ければ大學教授の講義は用を爲さぬ。従て大學教授は自信の強い人たる可きを要求する教科書を訂正し教科書を作つて行く人で教科書に引き廻される様な弱い人ではいけぬ——併しこれを履き違へると我執に捕はれた教授となり、眞理を辿ることが出来なくなる。此の調和は教授其人の天性に俟たねばならぬ。知らぬ事を即座に知らぬと述べ、誤りを誤りとして認めそれを即座に訂正する人で何等の言ひ譯もごまかしもせぬ潤達な性格の人でなければならぬ。

S教授にはそれがある、診斷もよく違ふが平氣である。

手術も時々大しくぢりをやるが平氣である。豫想の手術が出来ぬでも何等の言譯もせず平氣で皮膚を縫合する。學會の面前で『實の所自分はペーハア(PH)とは何の事やら知らぬので有ります』と平然として言つてのける。

大抵の教授は皆さうであるが、S教授の廻診も殊の外お粗末で素通り同様である。起立の出来る程の患者はベッドの側で直立不動の姿勢を取つて居る。腹内腫瘍といふ診斷で2歳位の小兒が寝て居つた。S教授がお伴(24.5人)を連れて大風の様に通り過ぎたあとでその小兒に近寄つて見ると1人の助手らしい人が同じくやつて來て腹部を撫でながら獨言の様に「これはスキバラ(糞塊だよ)」と曰ふ。

手術を主眼とする外科醫の一般的弊害がS教授にも窺はれる。外科醫は一般に診斷に苦心せぬ傾向がある。切り取つて見ればわかると曰つて病的狀態などを手術前に詳しく調べる事をなかなかせぬ。時には妊娠子宮を腹内腫瘍として切り取らふとする者もあるし實際切り取つた人もある。此の點になると猪子先生の診察の作法や診斷に對し趣味を持つて自ら進んで苦心される有様には非常に學ばねばならぬ、單に手術をするだけでは外科醫とも醫とも曰はれぬ。

其代りS教授の手術は傍で觀て居ると氣持がよい、其手術的操作には殆んど一寸の隙間も無駄も無い。例の Thorakoplastik で肋骨を4.5纏宛次から次へと切除して行くのは眞に疾風迅雷的で先づ第一の見ものである(但し此の手術が合理的か否かは疑問なり)。今腹壁を切りかけたと思つて一寸他を向いて居る間にも、胃をつまみ出して居る。

癒着も何も無かつたとは言ひ乍ら皮切から腎別出迄に5分間位で済ます。會陰部から行ふ直腸の切斷術も約40分位で完了する、(無論日本の材料と違ひ生理的に近いものばかりであるが)

次室で麻酔の準備局部消毒を済し次から次へと手術室へ運ぶ。S 教授は一々手術衣を取換へ次から次へと手術をして行く。助手の叱られる事も一つの見物である。一寸手の出し様が悪いといきなり力まかせに打たれる、押しのけられる、鉤の引き様が足らぬと *Zieh doch!* と言つて怒鳴られる、結紮絲の切り様が遅いと *Schneide doch ab* と吠える様に叱られる。

新參の助手らしい 1 人がいつも罵倒されて、或る時手術中に *Geh weg!* をやられた。其助手は手術衣を着た儘手術場をすどすどと退出した。手術の邪魔になると言つて「出て往け」をやられたのであるが無論其時だけで次の日はまた平素の様に出て来て居る。

手術臺の兩側には手術衣を着けて用意した助手が 1 人か 2 人宛差し控へて居る。各々小さな機械臺の前にして直立して居る。手術の主要部がすむと皮膚縫合は此等の助手がする場合が多い。無論教授自身が終までする事もある。

教授の機嫌の向いた時には此等の控へ助手の中から 1 人を自分の手術の介補人の 1 人として差し招く。これは一種の昇進である。呼ばれた助手はいそいそとして介補に加はる。° *Aber Sie müssen sich zusammennnehmen* (シツカリヤレヨ) と大聲で注意が出る。此の昇進助手もぶまをすると委細かまわず叩かれる。

看護婦の機械の出し様が二度續けて教授の意向の付度を過つた。「氣合が乗つて居らぬなあ」と思つて觀て居ると教授は時を移さず看護婦に向つて *Passen Sie vielleicht besser auf.* (もつと氣を配つたらどうだ) とやつた。流石に看護婦だけには *Du* でなく且つ言ひ方も多小柔かである。

教授の片腕となつて介補をよくする *Oberarzt* がある。

第一の照明燈の下で手術を済して第三の照明燈の下に用意されて横はつて居る患者を手術する爲に教授が其方へ歩を移して皮切をやりかけ様とする時に、其の第一助手は消毒衣の取換へが後れてまだ來て居らぬ。教授は右にメスセルを持ち切りかけながら左手を高く舉げて一聲 *Los!* 親愛の意味を持つた「オーイ!」或は「オイコラ!」と差し招く。助手は 2.3 間遠くから *Ja!* と應へながらどむ手袋の皺を延ばし延ばし手術臺に着く。教授はもう骨膜剝離をやつて居る。少しの「待つた」も無い。

或時手術が済んでから教授は助手の 1 人に何か注意を與へた、此の助手は新參と見へて何か 2.3 言辨解を述べ始めたと思ふと、教授は何時もの大聲を更に勵まして *Nichts reden! Quatsch nicht!* と言つて一喝の下に叱きつけてしまつた。

此の様な風であるから手術室で働いて居る雜役看護人の尻を蹴飛ばす位は大程にも思つて居らぬらしい。

京都の教室なら手術日毎に 2.3 人氣絶者が出るかも知れぬ位である。

看護婦だけは叱られた場合に肩をびくつかせたり他の朋輩と目配せしたりするが、助手連はどの様にひどくやられた場合でも決してその様な事はせぬ。顔貌も態度も平靜である。また同僚の叱られたのに對して同情する様な風も或はそれを『ヨイ氣味ダ』と思ふ様な風も一切見えぬ。

此等の點は實に感心である。つまりその様な心の餘裕の無い程に緊張して居るからであらう。

日本ならば一寸何か教授が注意するとすぐ顔を紅くしたり青くしたりして非常な侮辱をでも受けたかの様に考へたり周囲の同僚でも「一大事が起つたかの様に」縮んだり、膨れたり或は先づ長々と理由らしい事を辯じ立ててからでないと「否」と言ふ言葉を曰へぬ者が多いのに較べて非常なコントラストである。これは幼少からの教育習慣の差であるか或は人種の差でもあるか知らぬが彼我を對照して特に目につく點である。

日本ではとても眞似の出来ぬことである。

併し S 教授の仕方は直情徑行天真爛漫で何等の「皮肉」も「アテツケ」も「技巧」も無くてきびきびさうりとして居る。日本ならば禪堂で弟子共が痛棒を喰はされるのに比敵するであらう。

「叱られた」とか「叱られるのが怖い」とか、其様な微温い事を考へて居つたでは學問も技術も上達不可能である。

何等の罪が無くても弟子入りした當座は信用が無いから何かにつけて叱られ易いものである。茲で自分は今迄誰にも一切話した事の無い二つの例を述べて後進の參考に供したい。

故伊藤先生は當時臨床講義を殆んど毎週東京醫事新誌へ出された。その原稿を清書するのがなかなか大變で時間が多く費へた。「出来たか」「出来たか」と催促が出る、或る時 2 度目の催促でもまだ出来て居なかつた。先生は不興氣にあの濃い眉毛を動かして『あんたは横着ですね』と言はれた。自分は併し腹も立たず憤慨もせず心中に何等の動搖をも自覺しなかつた、黙つてそれを聞いて 3 回續けて書きなほしやつと出来上つた原稿を翌日先生へ差出した。後日同僚の 1 人が自分の机の抽出しに同じ原稿を 2 度も 3 度も書き直した屑が一つばい詰つて居つたのを見て驚いて居つた。

猪子先生が病後はじめて教室へ出られる様になつた時に第 1 着に其下で助手をして九病舎を受持つたのは自分であつた。潰瘍のある丹波から來た患者が廻診の度に「痛い痛い」と先生へ訴へる。先生は「ワゼリンをつけよ」と命ぜられた。自分は其の通りにした、次の廻診の時に其の患者が先生の姿を見るや否やまた「痛い」と訴へた。「ワゼリンをつけたか」と問はれる。「はいつけました」と答へる。先生は何を感じられたか婦長に繃帶を解かせ潰瘍面に當ててある綿紗をピンセットで裏返し、『着いて居らん、着いて居らん』と言はれた。

自分は意の中で『氣のきかぬ婦長だなあ「今朝交換の時に御つけになりましたが」と言つて呉ればよいのに』と思つた儘無論一言も言ひ譯を述べぬ。此時自分は勿論寸毫の不滿も無く腹も立たず悲觀もせず心中に何等の動搖をも感じなかつた。従てあとで婦長に小言を述べるでも無し同僚に告げるでも無し家に歸つて細君に怒り散らすでもなかつた。

其後間もなく先生は自分を信用されて、自分は實に親身の指導を受けた。廻診後廊下を歸る時に患者の事で御尋ねする爲に後から「先生!」と呼びかけると、先生は自分を顧みて『何んじやい』と應へられる様になつた。此の最初の『何んじやい』を聞いた時には涙が出る程嬉しかつた。

禪堂に於ける大痛捧と同じ様なS教授の仕方が必ずしも可なりと言へぬかも知れぬが、その助手連がいつも平靜な態度でそれを受け入れて居る有様は到底近頃の日本では見られぬものであろふ。「打たれても親の杖、なつかしければ去りやらず」の境涯が此等の助手によりて眞正に實現されて居るのは感服せずには居られぬ。(完)